

幾山河

第31号

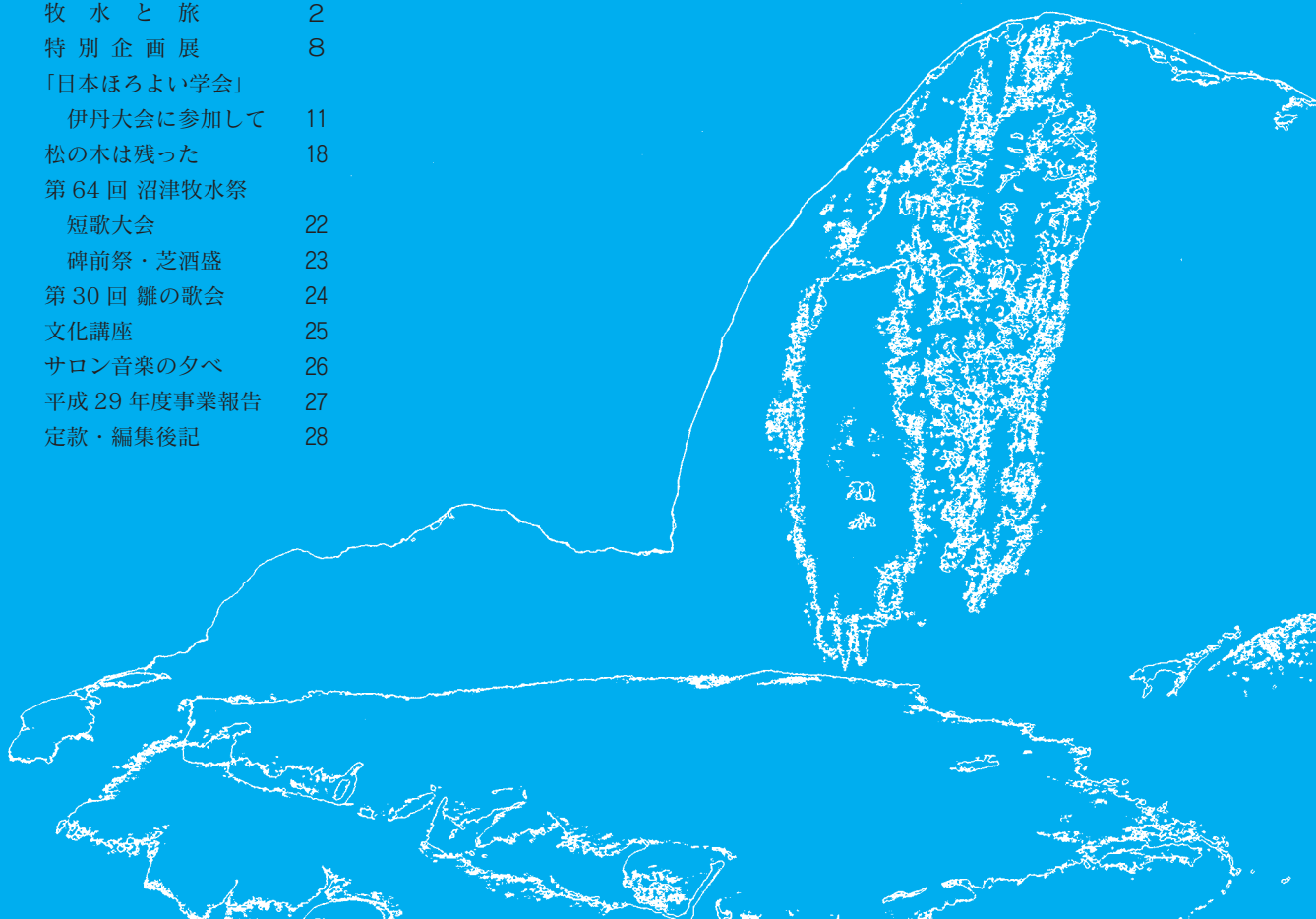
平成30年 5月15日

発行

公益社団法人沼津牧水会

目次

牧水と旅	2
特別企画展	8
「日本ほろよい学会」	
伊丹大会に参加して	11
松の木は残った	18
第64回 沼津牧水祭	
短歌大会	22
碑前祭・芝酒盛	23
第30回 雛の歌会	24
文化講座	25
サロン音楽の夕べ	26
平成29年度事業報告	27
定款・編集後記	28



伊藤一彦

明治四十三年に歌集『別離』で歌壇のみならず広く文芸の世界に新鋭歌人としてデビューした牧水は、独自の創作活動を続けた。その牧水に対する評価は時期によって高くなったり低くなったりはするが、つねに一定の評価がなされてきた。たとえば大正期の短歌総合誌「短歌雜誌」が大正七年二月号に発表し

ている「歌人新番附」を見ると、次のようになっている。

東の方
西の方

大関 齋藤茂吉 若山牧水

張出大関
島木赤彦
太田水穂

関脇 北原白秋 前田夕暮

小結 中村憲吉 古泉千樫

張出小結 吉井 勇 土岐哀果

前頭 釋 迢空 尾山篤二郎

「アララギ」が大きな力をもっていた大正七年の「番付」だが、牧水が茂吉とならんで最高位の大関にあげられていることにあらためて注目したい。

「牧水は昭和の初めに世を去ったが、『創作』の昭和三年十二月号の「若山牧水追悼号」は三百数十ページにおよび、寄稿している歌人や詩人、小説家、芸術家たちの文章は今日読んでも深い感銘をおぼえる。牧水論の宝庫である。

「短歌研究」と「日本短歌」の九月号がともに牧水追悼の特集を組んでいる。前者は馬場恒吾、青野季吉、大井廣、大悟法利雄、若山喜志子が執筆している。後者は金子薫園、太田水穂、土岐善麿、今井邦子、佐藤緑葉、平賀春郊、仲田勝之助、原田實、尾山篤三郎、

[illegible]

『短歌雑誌』大正7年2月号の「歌人新番附」

前田夕暮、北原白秋が執筆している。いずれも読み応えのある特集である。

戦中、戦後も牧水作品は読まれ続けた。その傍証として英文学者の中野好夫の『文学の常識』から引きたい。昭和二十六年の出版で、文化講座の講演記録である。

文学と呼ばれるものの中には、時代がいかに変ろうが、あらゆる時代を通じてある一定の人生の年齢層、ことに青少年層ですが、それに常に訴えるというある種の文学があります。

戦争後、特に青年男女を読者対象としたいろいろな雑誌にしばしば青春の愛唱歌とか、抒情名詩選とかいつた欄が設けられており、またそれに解説などがついていたりしますが、それらを読んで私たちは一種の感慨に打たれることがあります。たとえば、

幾山河越え去り行かば淋しきの果て
なむ国ぞ今日も旅行く
白鳥は悲しからずや海の青空の青に
も染まずただよう

という若山牧水の名歌は、私なども中学か高等学校のころから覚えていた歌ですが、それが今もやはりちゃんと出ていま

す。かと思うと、ドイツのカール・ブッセという詩人の詩で、上田敏が有名な翻訳詩集『海潮音』の中に訳出している

山のあなたの空遠く

幸い住むとひとのいう

ああ、われひとと尋めゆきて

涙さしぐみかえり来ぬ

山のあなたになおとおく

幸い住むとひとのいう

という短詩などもこれまた私たちが中学生時代から暗誦していたものですが、これがやはり今の人にもよほど訴えるものとみえて、まず必らず入っています。今一つあげますと、いつか私がある若い人の学校へ用があつて訪ねたことがありますが、通りがかりにふと廊下から見ますと、誰か生徒が休み時間にでも書いたものでしょう。黒板に

花を尋ねて出でしま

帰らぬ人の恋しさに

丘に上りて名を呼べど

というのにはじまる、詩の一節の落書が残つておりました。休み時間に手ナグサミに板書するくらいですから、当然これも青春の愛誦詩とみななければなりません。ところで考えてみると面白いのですが、今の牧水の歌といい、ブッセの詩といい、

これらは私なども愛誦しましたし、また私などより大分先輩の人たちもまた青春時代に一度は愛誦して、文学への心を開く機縁になつている。しかも驚いたことには、今もまた同じように、即ち、日本が戦争に敗けて、私たちや、私たちの先輩の青春時代とはまるで違った世の中になつても、なお昔と同様に若い人たちに訴えかけているのでありましょう。してみると、同じことは、今後の世代の人々にもくり返されて行くのではありますまいか。

牧水の作品が時代をこえて読み継がれ、今後も読み継がれるだろうと語っている(牧水の歌の引用は歌集とは違うがそのままにしてある)。牧水の歌の永遠性である。

それでも、戦後の歌壇において牧水短歌に對する評価は十分でなかった。第二芸術論後の新しい短歌の風潮は牧水短歌が目指したものと別のところを狙っていた。そんな牧水の短歌が新たな注目を浴びるようになったのは昭和五十年代に入つた頃からだろうか。そのことについては別の機会に述べたことがあるのでここでは略したいが、その牧水の復権に大きな役割を果たしたのが沼津牧水会であり、日向と延岡の牧水顕彰会である。

二

牧水作品の本質はと問われたら、私は「あくがれ」であると答える。第一歌集『海の声』から有名な歌を引きたい。

けふもまたころの鉦をうち鳴しうち鳴
しつあくがれてゆく

後で触れる明治四十年の夏の旅の歌である。中国山地で歌われた作だが、実景は少しも歌われていない。ポイントは「あくがれ」の語である。「岩波古語辞典」に、「あくがれ」の「あ」は「在」、「く」は「処」、「がれ」は「離れ」の意味であり、「心身が何かにひかれて、もともと居るべき処をさまよう意。後には、対象にひかれる心持を強調するようになり、現在のアコガレに転じる」と出ている。牧水がいかに「あくがれ」の語を愛したかは、中学時代の日記や早稲田時代の手紙や随筆にしばしばこの語が使われていることに明らかである。古くは和泉式部や西行法師の和歌にも出てくる言葉である。そんな伝統ある言葉を牧水は近代になって蘇らせた。古典和歌の「あくがれ」にポジティブかつアクティブな意味を強く付与したのである。

牧水がそのような「あくがれ」を主張したのは、背景には明治三十年代から四十年代

にかけての政治的・社会的背景もある。ただ、今は牧水の個人的な生い立ちからの影響に触れてみたい。それは一つは牧水の生まれ育った東郷町坪谷が山国であることである。山国であるため、少年時代からつねに山の向こうの世界にあこがれた。海へのあこがれは特に強かった。もう一つは若山家はもとも坪谷でなく、祖父健海のときに移り住んだいわば他国者であることである。坪谷では他国者のことを「濡草鞋」と読んでいたそうであるが、牧水は自分の家は「濡草鞋党の一人」だと言っている。ということとは、自分のルーツは別の遠い世界にあり、その地を探し求めたいというあこがれが強かったということである。

三

「あくがれ」が現実形を得たものが旅である。牧水が旅の歌人と言われるのは当然であろう。ただ、牧水にとって、旅行だけが旅ではなかった。人生そのものが旅だった。

第二歌集『独り歌へる』の序文に次のように書いている。

私は常に思つて居る、人生は旅である、我等は忽然として無窮より生れ、忽然として無窮のおくに往つてしまふ、その間の一步步の歩みは実にその時のみの一

歩々で、一度往いては再びかへらない、私は私の歌を以て私の旅のその一步步のひびきであると思ひなして居る、云ひ換へれば私の歌はその時々私の命の碎片である。

人生そのものが旅であるなら、幾日間かどこかに出かけていく旅は人生の縮図ということになる。牧水の旅の歌や紀行文は実際「人生の縮図」として詠めるものが多いのである。中野好夫がとりあげた「幾山河」の歌などまさに人生そのものを歌っているように思えるところに愛誦歌たる所以があるに違いない。

以下、牧水の旅の歌を歌集順に紹介してみる。

白つゆか玉かとも見よわだの原青きうへ
ゆき人恋ふる身を
椰子の実を拾ひつ秋の海黒きなぎさに立
ちて日にかざし見る
あはれあれかすかに声す拾ひつる椰子の
うつろの流れ実吹けば

明治四十年の夏に帰郷したときに、まだ行ったことのない宮崎県の南を旅したときの『海の声』の歌である。一首目は、海の旅のなかで恋心をいっそう高めている。二首目と三首目は「椰子の実」を自分と同じ旅人とし



て捉えているのではあるまいか。

夕空の風をしぞおもふ火の山のけむりは
遠くうちながれたり
火の山にしばし煙の断えにけりいのち死
ぬべくひとのこひしき
白雲のいざよふ秋の峰をあふぐちひさな
るかな旅人どもは

明治四十一年八月の軽井沢での作品である。

『独り歌へる』所収。早稲田を卒業したばかりだった。火の山の煙をじつと眺めている。牧水は遠くを眺めることを少年時代から好んだ。二首目に「ひとのこひしき」とあるのは小枝子という女性との恋愛および結婚問題がこのころの牧水にとって最大の問題だったからである。三首目の「ちひさなるかな旅人どもは」の背後に恋の懊悩を読むことも可能である。

胡桃とりつかれて草に寝てあれば赤とんぼ等が来てものをいふ
かたはらに秋ぐさの花かたるらくほろびしものはなつかしきかな
旅人は松の根がたに落葉めき身をよこたへぬ秋風の吹く

明治四十三年秋の長野県の旅の歌である。

『路上』所収。このころ、恋の悩みが最も深刻だったようだ。これらの三首の特色はアンクルが低いことである。一首目は草むらに寝転んで赤とんぼと対話している。二首目も寝転んでいるからこそ秋ぐさの語る言葉を聞きとめることができたのである。三首目は自らの身を地面の上に横たえている。日常と離れた旅だからこそこのように自分がある意味でゼロに近い存在にすることができたのではあ

るまいか。

みな忘れよ崎のみなどのこのひと夜五月の雨がふりそよぐなり
旅人のからだもいつか海となり五月の雨が降るよ港に
越えくれば岬かなしくきはまりて海となりまた遠くとほく岬見ゆ

明治四十五年五月に三浦半島の三崎を訪れたときの歌である。『死か芸術か』所収。牧水は小枝子とついに結婚できず別れてしまっただが、そののち幸いにも太田喜志子と結ばれた。その結婚直後の歌で、新しい自分を蘇生させようとしているように思える。そのためには海の力が必要だったのだろうか。一首目の「みな忘れよ」は自分自身に言い聞かせている感じである。

やと握るその手この手のいづれみな大きからぬなき青森人よ
いつか見むいつか来むとてこがれ来しその青森は雪に埋れ居つ
名に高き秋田美人ぞこれ見よと居ならぶ見れば由々しかりけり

大正五年の三月から一月半、東北地方に旅したときの歌である。『朝の歌』所収。宮崎生まれの牧水にとって北の東北地方に出かける

ことは以前からの念願であり、ようやく実現できたのであった。一首目と二首目は青森での作。青森の人と自然に出会う喜びが率直に表現されている。三首目は秋田での作。なんともおかしみのある歌で、「由々しかりけり」には思わず笑ってしまう。近代短歌にはめずらしいユーモアの歌である。

筧より水をひきつつ火焚きつつみづから
わかす風呂のたのしさ

板の間のひろき真なかに据ゑられしひと
つの膳に行きて坐るかも

酒に代ふるいのちもなしと泣き笑ふこの
ゑびどれを酔はせざらめや

大正七年五月に比叡山の古寺に七日ほど泊まったときの歌である。『くろ土』所収。思いがけないことで荒寺に泊まることになったのだが、牧水の旅としてはそんなハプニングはめずらしいことではなかった。初めの二首にはそんな寺に泊まったときの様子がしっかりと歌われていて読者に場面が目に浮かぶ。余談ながら、一昨年わたしはこの寺を訪ねた。荒れてはいたが、建物自体はまだ残っていた。三首目は孝太という名の寺男を歌っている。世を捨てたようにして寺男となり酒も断っていたが、牧水との出会いによりもう一回人生を歩き直そうとする。牧水の紀行文「比叡山」

「山寺」に詳しく記されている（「比叡と熊野」所収）。このようないわば無名の人々との温かい交流も牧水の旅の特色と言える。

わが行くは山の窪なるひとつ路冬日ひかりて氷りたる路

行き行くと冬日の原にたちとまり耳をすませば日の光きこゆ

手にとらばわが手にをりて啼きもせむその小鳥を手にも取らうよ

大正七年十一月に群馬県利根川上流を旅したときの歌である。『くろ土』所収。十一月というと、この地域はもう冬だった。溪に沿って歩きながら、たつぷりと豊かな自然を牧水が楽しんでいることがわかる。とくに二首目の結句「日の光きこゆ」は深く印象に残る。「光」を聴覚で捉えている。というより、光の声を心で聴いているのだ。三首目の口語を用いた表現は小鳥に対する親しみがおのずから生んだものと思う。

香貫山^{かぬきやま}いただきに来て^{あこ}吾子とあそび久しく居れば富士晴れにけり

駿河なる沼津より見れば富士が嶺の前に垣なせる愛鷹^{あしたか}の山

風の音こもりて深き松原の老木の松は此処に群れ生^おふ

牧水は大正九年八月に東京から沼津に移り住んだ。一言でいえば、沼津の自然と風土が大いに気に入ったのだった。これら三首を旅の歌の一連であると読んでもいいだろう。最初の二首の香貫山、富士山、愛鷹山、沼津、駿河などの山や土地の名がでてくるのは、旅人の挨拶である。「これからお世話になりますどうぞよろしく」と。三首目は千本松原である。牧水がどれほど千本松原を愛したか、多くの短歌作品と「千本松原」の文章に明らかである。

故郷の溪荒くして砂あらず岩を飛び飛び
鮎は釣りにき

釣り得たる鮎とりにかし笑ふ時し父がわらひは瀬に響きにき

釣り暮し帰れば母に叱られき叱れる母に
渡しき鮎を

昭和二年の作である。牧水は昭和三年に世を去ったので死の前年の作ということになる。『黒松』所収。この三首は故郷に帰ったときの旅の歌ではない。沼津にあって故郷を想っている歌である。その点では旅の歌ではないが、少年時代をなつかしく回顧しつつ心は故郷に帰っている。場面がじつにリアルである。時間と空間を旅することで生まれた作と言える。

文化講演会「牧水と旅」 伊藤一彦先生

沼津市若山牧水記念館開館三十周年を記念した「特別企画展」の行事として、平成二十九年十月二十九日（日）に、伊藤一彦先生による「牧水と旅」の演題での文化講演会を開催いたしました。当日は、台風二十二号の影響で飛行機が欠航してしまい、先生のご来館を心配いたしました。先生は新幹線を乗り継いでお越しいただきました。悪天候にもかかわらず、五十九名が参加していただき、席も満杯になりました。充実した講演会が開催できました。



われわれにとって旅とはどんなものか、なぜ旅にでかけたくなるのか、そして人生において旅はどのような意味をもつか、など旅についての問いはいくらでもある。牧水の旅の歌と紀行文、そして旅人としてのその人生は、それらの問いの答えを与えるよりも、さらに問いを豊かに深めてくれる。

なにゆゑに旅に出づるや、なにゆゑに旅に出づるや、何故に旅に 『死か芸術か』

「筆者プロフィール」 いとう かずひこ

昭和十八年宮崎市に生まれる。早稲田大学哲学科卒業。在学中に短歌を始め、卒業後は帰郷し教職の傍ら作歌活動をつづける。同郷の歌人、若山牧水を研究。現在、日向市の若山牧水記念文学館館長。牧水研究会を主宰して、雑誌『牧水研究』を発行。『若山牧水歌集』（岩波文庫）を編集。『牧水の心を旅する』『いざ行かむ、まだ見ぬ山へ』『ぼく、牧水！』『若山牧水その親和力を読む』をはじめ多くの著作がある。主な歌集に『海号の歌』『読売文学賞』『新月の蜜』（寺山修司短歌賞、『微笑の空』（追空賞）、『月の夜声』（斎藤茂吉短歌文学賞）、『待ち時間』（小野市詩歌文学賞）などがある。毎日新聞歌壇選者。雑誌『心の花』選者。読売文学賞、若山牧水賞などの選考委員を務める。

沼津市若山牧水記念館開館三十周年記念

特別企画展「牧水と旅」

平成二十九年九月二十六日(火)～十二月三日(日)

沼津市若山牧水記念館開館三十周年を記念した「特別企画展」は、九月二十六日午前十時、榎本篁子館長の代理でご出席いただいた牧水長男旅人氏の三男若山三郎氏、大沼明穂沼津市長と服部裕美子沼津市教育長の代理中島康司沼津市教育委員会文化振興課長並びに林茂樹本会理事長によるテープカットでオープニングとなりました。

このたびの「企画展」は、「牧水と旅」をテーマに、牧水の年譜を展示して、旅の日程と紀行文等を詳しく紹介し、旅先を記した地図と旅先で撮った写真を掲示するとともに、牧水の著作の単行本と雑誌等のレプリカを制作して展示いたしました。

牧水は、大正九年、ほんの一二年の静養のつもりで、東京から沼津へ移住し、その後、富士山を仰ぎながら暮らすことのできる沼津が気に入り、家族の健康のためにも沼津へ永住する決意をしました。永住するには、執筆活動をするための書斎があつて、雑誌『創作』の編集・発行所を兼ねた住宅を建設する必要がありました。牧水は、その資金を調達する

方法として「揮毫頒布会」を催すことにしました。「揮毫頒布会」の開催を目的とする旅が「揮毫旅行」でした。この努力が実り、大正十四年、千本松原の一角に約五百坪の土地を購入して、約百坪の住宅を建てることができました。牧水の夢の実現です。

この「揮毫旅行」は、沼津と関係が深い旅でした。そこで、旅のうちでも、「揮毫旅行」を特に取り上げて紹介しようと考え、信州、尾州、九州、北海道、朝鮮半島への行程を記した地図を展示いたしました。

この「揮毫旅行」の紀行文等は、単行本に収められておりません。そこで、雑誌『創作』をつぶさに調べているうちに、九州への旅に行した喜志子夫人の紀行文を見つけました。北海道への旅については、「北海タイムス」に書いていると想定された随筆を国立国会図書館へ出向いて見付けることができました。

これらの紀行文等を収録した『牧水 揮毫旅行記』を記念として刊行いたしました。

なお、今回の「特別企画展」への参会者は、一〇七一人でした。(事務局 大島葉子)







若山三郎・美恵子ご夫妻に展示の説明をする林茂樹本会理事長

「日本ほろよい学会」 伊丹大会に参加して

沼津牧水会監事

鈴木弘行

鈴木建築設計事務所所長

第十五回「日本ほろよい学会」は平成二十九年四月二十二日(土)伊丹市の伊丹商工プラザのマルチメディアホールで行われた。

沼津牧水会から林茂樹理事長、理事の浅井治、金子安夫、長澤靖夫、監事の鈴木弘行、会員の有賀直子、石田孜郎、石田多嘉子、小出和夫、鈴木玲子、原悦子、三宅芳則、山下数高と事務局の大島葉子の計十四名が参加した。

四月二十二日の朝、沼津を発ち、三島で新幹線に乗り換え、伊丹市に向かった。有賀さんは東京から、石田夫妻は大磯から三島駅で合流した。

私は伊丹市は初めてである。伊丹駅よりタクシーで会場の伊丹商工プラザへ向かった。伊丹市は幹線道路は別としてインターロッキングで舗装されたきれいな町であった。

会場の建物の入口に「清酒発祥の地」「酒のまち伊丹酒」というのぼり旗と老松、白雪、大手柄と大きく書かれた文字と、薦被りが三樽置かれてあった。さすが酒の町である。六階のホールに行くついでに大勢集まっていた。ほろよい学会伊丹大会のテーマは「酒と短歌と俳句と川柳」である。一時からの開催であった。

まず、郷土研究家の森本啓一氏の「伊丹と酒と牧水」のテーマでの講演。牧水が小西酒造宛に出した謝礼の葉書が発見されたことと、そこに書かれている大阪の友人とは桐田路村という歌人だろうということを話された。



森本啓一氏の講演

講演の内容をまとめてみると、路村は、牧水の追悼文「君を懷ふ」に、牧水と創作社の社友たちと伊丹の料理屋で宴会を開いたことを書いている。大正二年六月(牧水二九歳)の頃であった。牧水は酔って朗吟と声色をやったようである。なかなかの芸達者と思われる。

その時の酒が「白雪」であった。「白雪」はあまり癖のない酒であり、この酒が一番うまいと牧水が言ったようである。それから数年後、路村たちが小西酒造から「白雪」を牧水に送った。手紙を読んだ牧水は「白雪」の届くのを今か今かと待ち焦がれている様子で次の歌を詠んでいる。

津の国の伊丹の里ゆはるばると白雪
来るその酒来る

酒の名のあまたはあれど今はこはこ
の白雪にます酒はなし

手に取らば消なむしら雪はしけやし
この白雪はわがこころ焼く

白雪は白雪はとて待つ苦しその白雪
はいまだにかあらむ

牧水は「白雪」を人に飲ませるのが惜しかったらしく、少し飲ませた後は別の酒を飲まずんだと路村に手紙で書いている。また、路村は牧水への追悼文のなかで、「最後の酒として私は『白雪』を送れ

なかつたことを今は心から残念に思ふ」と書いている。

桐田路村は島根県津和野町出身で牧水と早稲田大学の同期で、東洋紡にお勤めの歌人であった。

さらさらと草がよれゆく風にわび一人の道は思ひにあまる

木の実落つこの静寂をまた追うてほろりと一つまた木の実落つ

木屋の花ちらしたるそのあとに秋雨の降るまこと静かに

路村は「あゝ、とうとう君も逝つてしまった。私は私の周囲を見廻して、なんだか独り取り残されてる寂しき私の哀れな姿を思ふ」と書いている。

生涯五万首ほどの短歌を詠んでいる。静謐な感性と細やかな情景描写をする自然詩人であった。七十二歳で亡くなっている。牧水はよき友人に恵まれていたのだと思う。

森本氏の講演の次は鼎談「女性と酒——働き盛りの女性歌人、俳人、川柳人——」であった。和装の妙齡な女性、芳賀博子、朝倉晴美、塚本瑞江の各氏が代表的な自作を紹介された。

川柳の芳賀博子

グラスからふわりと浮かびあがる駅



左から塚本瑞江、朝倉晴美、芳賀博子と司会の植山俊宏の各氏

俳句の朝倉晴美
夫でない人と呑むジン花曇り
歌人の塚本瑞江
ハナタレをバクダンと呼ぶ三杯目砕けた
時をもろともに飲む
それぞれ関西でご活躍の女性の酒にまつわる鼎談であった。



左から伊藤一彦、佐佐木幸綱、宇多喜代子、坪内稔典の各氏

次に、スペシャル座談「酒の短歌・酒の俳句」と題する佐佐木幸綱、伊藤一彦、宇多喜代子、坪内稔典各氏による座談会が行われた。

佐佐木幸綱

徳利の向こうは夜霧大いなる闇よしとして秋の酒飲む

大徳利のなかにて鯨を食つて居る夜の男となりけるかも

伊藤一彦

味酒のみはふかぶかと酔ひゆきて待つところなりいかなる明日も

わらち酒こそ最も大切ぞ別るる人とねんごろに飲む

宇多喜代子

濁酒を酌むと耀う杉林

鯨鯨の性根たたえ昼の酒

坪内稔典

ぼつねんと酔うか山々近くなる

酒飲んで漂流物となつて春

それぞれの短歌と俳句が紹介された。スケールの大きい作品である。その後、「牧水の酒の短歌」と今話題の「酒の短歌と酒の俳句」が紹介された。

伊藤一彦氏の吉井勇の短歌

事わかず疑ひしげくなる時は壺の口より酒にもの問う

の解説が面白かった。これは吉井勇の友人が、人生がわからなくなつて死のうかと思つていたときに目の前に酒の壺があつて、壺の中か

らお前はこうした方が良いという声が聞こえてきたという。それで死なずにすんだという話である。美味しい酒には希望を感じさせるものがある。酒飲みの自己弁護かもしれないが、領けるところがある。

この日の宿泊先である伊丹シティホテルへの道すがら、小西酒造の前の

手に取らば消なむしら雪はしけやしこの白雪はわがこころ焼く



小西酒造の前の牧水歌碑前で

の歌碑を訪ねた。後で気が付いたのだが、お店の隣に木造の古い酒蔵を改造したレストラン「白雪長寿蔵」があつた。薄暗い酒蔵の中で酒を飲んでみたいと思つた。今度訪ねてみようかと思つている。

交流会「ほろよいの夕べ」は、五時から伊丹シティホテルで行われた。塩田眞若山牧水延岡顕彰会会長の牧水の「白雪の歌」の朗詠に始まり、佐佐木幸綱日本ほろよい学会会長の挨拶、藤原保幸伊丹市長、首藤正治延岡市長、伊藤一彦氏の挨拶と続いた。宇多喜代子氏の乾杯で宴は始まった。ちなみに、伊丹市では、乾杯の酒は日本酒でと市の条例で決まっているそうである。

沼津牧水会の参加者全員が壇上に上がつての挨拶もあり、和やかに宴は続いた。小西酒造の提供による「白雪の歌」の銚子セツトのくじ引きによるプレゼントなどで賑わつた。

宴も終わり、ホテルのベッドに横になると、そのまま寝込んでしまった。まさに「酒飲んで漂流物となつて春」である。ことは文化都市を標榜する伊丹市での「ほろよい」の一日は静かに終わった。

二日目、三宅芳則氏の運転でマイクロバスに乗って姫路への観光に出かけた。



圖教寺にて記念撮影

まずは書写山圓教寺^{えんぎょうじ}への参拝である。書写山の中にある圓教寺は千年程前に性空上人によつて開かれた天台宗のお寺で、摩尼殿、開山堂、大講堂、食堂、護法堂などの重要文化財十三棟が建っている。シャトルバスで登って

行く。最初に摩尼殿を参拝した。山の斜面に建てられた建物で、清水寺と同じ様な舞台造りになっている。本堂の位置が高いので周囲を見下ろせる様になっている。そこに立って眺めていると外の新緑の中に紅葉しているモミ



圓教寺の奥之院開山堂

ジが目に入った。四月というのに紅葉してるとは、と不思議に思っていたが、後ほど調べてみたらノムラモミジという種類で元々赤いのだということが分かった。薄暗い内部と対比するように春の新緑の中に赤いモミジという光景が深淵さを更に増してくるようだった。そこからさらに足を運んで奥之院まで行ってみた。そこにある開山堂は方形のいい形をしていた。大陸文化の影響を感じさせるものがあった。室町時代の建物だそうだ。



姫路文学館

次に姫路文学館を見学した。文学館は安藤忠雄氏の設計である。入口までのアプローチの左側に司馬遼太郎記念室のある南館がある。その前に池、小川を造りその右側には円形と四角形を合体させた展示室北館がある。左右の美しいコンクリート打放しの建物の間に、

黒の玄昌石のスロープがあり、その向こうに空が見えるだけである。シンプルで美しい風景を造り出している。建物を造るといっても風景を造り出しているといった風である。見事なものである。内部は回廊形式の展示空間になっている。

展示には播磨風土記の伝説、姫路城の歴史や縁の文人たちの紹介がしてあった。面白かったのは播州皿屋敷の話が展示されており、お菊スパイ説が興味深かった。二階の展示室では没後二十年藤沢周平展が催されていた。

文学館に向かう途中、バスの中からみた建物で興味をそえられるものがあつた。二階建ての住宅で安藤忠雄氏の設計かと思われた。最初に文学館を出て、二三分戻ってその住宅を外部からであるがじっくりと見学した。外部が四mほどの高さの壁で囲ってあつた。建物の横にあまりきれいとは言えない小川が流れていた。川と壁との間に隙間があり、細い竹が植えられていた。壁に開口が開けられていて、内部からその竹が垣間見られる様になっている。写真をご覧ください。



川と壁の間に 細い竹の植えられた建物

私が家を見て、暮らし始めてから気が付いたのは、居間の窓から毎日見てるのは向かいの家である。安藤氏の場合、部屋から見える景色が良くない時は壁で隠してしまつて、その中で美しい風景を造りだしている様である。ただそれともかなり勇気がある話である。

昼食は海神という店で摂った。板の間にテーブルがあり座るようになっていた。酒を飲むときは座るにかぎると思う。昼の酒は美味しい。美酒と美食で満ち足りた状態になった。三宅さん、申し訳ない。



姫路城前にて記念撮影

そこを後にして姫路城へ向かった。姫路城は広大な敷地に優美な姿をみせていた。天守閣までのぼった。脊柱管狭窄症を患った私にとっては、階段の上りが難行苦行であった。姫路城は華麗さ、優雅さの形容詞がよく似合う城である。

神戸の宿泊はホテルモンテレ神戸であった。三ノ宮駅近くの雰囲気のあるイタリア風のホテルで、少しこだわりすぎかなと思われるふしがあった。エレベーターでは、階数を示す文字盤が半円形になっていて、時計の針の様に階の数字を指していた。アナログでもある。中庭に噴水もありミラノ風でもあった。

夜の懇親会は、「ふくみみ」というホテルから近い居酒屋で行われた。若者向きの店で、飲み放題であった。

旅行の行程を作ってくれた長澤先生は以前この店を訪れたことがあるらしかった。というよりもほぼ全行程、訪ねた所を主にして計画されたという話であった。安心してゆったりとした旅ができるのはそのせいかなと思った。改めて感謝いたします。

旅行三日目は、朝、ホテルの近くの生田神社に寄った。

二十二年前、阪神淡路大震災の時に社殿が倒壊しているのをみた。今は復旧されていて当時の様子は見られないが、当時建築の設計仲間と芦屋あたりで電車を降りて三ノ宮まで戦場の様な町を三人で黙々と歩いた

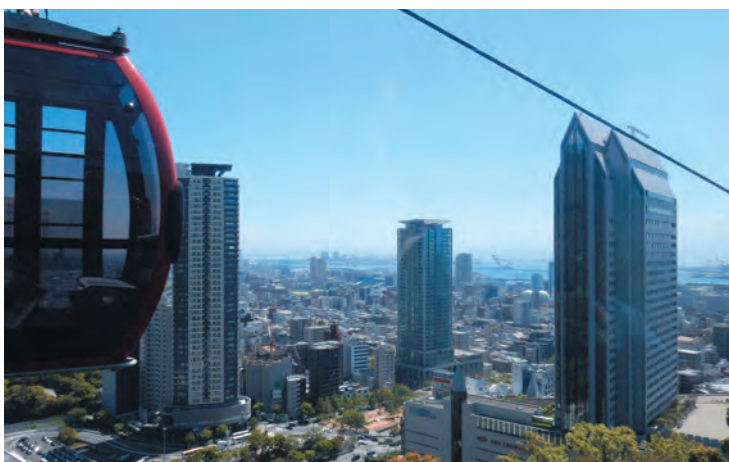


生田神社前にて記念撮影

ことが思い出された。行けども行けども焼け野原が続いていた。三ノ宮の近くでは帯状に遠くまで大きな建物が倒れていた。活断層の上の建物とみられた。ショックだった。今まで自分のしてきたことが全て否定された様だった。自信を取り戻すのにだいぶ時間がかかった。沼津に帰ってから、悪夢のようなその光景が目焼き付いていて、しばらく頭から離れなかった。

神戸は大都市である。復興した新しい街である。当時の面影はみられなかった。

次に訪れたのが、布引ハーブ園である。ハーブ園山麓駅から山頂駅までロープウェイで向かった。天気も良く神戸の街が一望に見下ろせた。昼食はハーブダイニングで取った。ドイツの木造建築風な建物である。ビールとワインとハーブティーを飲み、私たちはガラス窓のコーナーに陣取り、まるで自然の中で食事をしている様だった。会話も弾んだ。



布引ハーブ園へ向かうロープウェイから見た神戸の街

ハーブ園を散策しながら降りて行くと異人館の方に出る。そしてオーストリアの家、デンマーク館、オランダ館、風見鶏の館、萌黄の館などを訪ねた。当時の貿易商人の生活の一端を垣間見ることが出来た。

降り際に、「北野坂にしむら珈琲店」に有賀直子さん、鈴木玲子さん、山下数高さんと一緒に立ち寄った。建物の外部は蔦で覆われていて、内部は英国調で落ち着いた雰囲気のお店であった。

後でHPを見ていたら、戦後、川瀬喜代子さんという方が、小さな喫茶店から始められて、昭和四十九年に日本初の会員制喫茶店として開店されたそうである。震災以降は一般に開放される様になったという。神戸を中心に「にしむら珈琲店」だけで十一店舗もあるという。経営哲学は「二期一会」「二杯のおもてなし」だそうである。質の高い味と重厚な英国風（ドイツ風？）の店構えが神戸の人たちだけでなく、神戸に来たら必ず立ち寄るといふ人たちによって支えられているようだ。灘の酒蔵「菊正宗」の井戸から毎朝汲みでくるといふ「宮水」を使った珈琲は、格別美味しかった。神戸を愛し、珈琲をこよなく愛したひとりの女性による珈琲店の物語「神戸つ子の応接間 川瀬喜代子」とい



布引ハーブ園

う本も出版されている。ふと立ち寄った店にもいろんなドラマがあるのだなと思っている。最後の晚餐は「しゃぶ扇新神戸店」での飲み放題食べ放題であった。三日も飲み食いをしていると仲間という意識が芽生え、会話も弾み、愉快的な最終日を迎えることが出来た。次回の血液検査の結果がたいへん気になっている。恐ろしいことである。

松の木は残った

千本松原「築山」顛末記

沼津牧水会理事長

林 茂 樹

千本山乗運寺住職

千本松原の松の木は、伐採されずに残りました。多くの皆さまの温かいご支援のおかげだと心から感謝申し上げます。

・・・

平成二十六年、沼津市は住民の命を津波から守る津波避難施設という名目で、千本松原の一角に、「築山」(人工高台)を造成する計画を立てました。千本松原の松を百何十本も伐採し、田子の浦港の浚渫土にセメントを混ぜて盛土をして、標高十五メートルの「築山」を造成しようということでした。

これを知り、同年九月十六日、時の栗原裕康沼津市長、副市長、教育長をはじめとする沼津市当局と、沼津市議会議員の皆さまに「千本松原の松を守ってください！」という請願書を提出いたしました。しかし、聞く耳を持つただけませんでした。

そこで、「松の木伐採反対」の署名運動に入り、沼津牧水会や市民の皆さまのご協力を得て、数日で、数千人の署名が集まり、十月九日、沼津市長に署名簿を提出しました。

栗原市長は、十一月十三日に植生学専門の宮脇昭横浜国立大学名誉教授を招いて、意見

を聴いたものの、松の伐採方針も「築山」の高さの変更もしないとの意を表明しました。

これに納得できず、十二月十二日、松を伐採せずに津波から住民の命を守るための代替案を提示するなどしながら、松の伐採反対運動を継続してまいりました。

二十七年三月、沼津市は、「築山」の造成に伴う松の伐採計画をやつと見直すことになり、磐田市から樹木医の正木伸之氏を招き、「孤高の松」「夫婦の松」と愚生(ぐせい)の名付けた三本の太い松の根回しを実施し、発根状態を見守ることにしました。

このため、三本の太い松の移植が可能であることが確認できるまでは、「築山」造成に着手しないであろうと思っていたところ、三本の松を避ける形に「築山」の一部形状を一時的に変更して、十月一日から造成工事に着手すると地元の自治会に通知したということを知りました。

驚いて、九月二十四日、これに反対する嘆願書を栗原市長に提出しましたが聞き入れてもらえず、造成工事が始まり、翌二十八年三月末には、太い松三本を避けた形で一部土嚢

積み「築山」が完成しました。

その後、三本の太い松の樹勢と「築山」は危険な山ではないのかと気にしながら見守ってまいりましたが、三本の太い松の根回しをして三年を迎えた二月八日、樹木医が松の発根状態を確かめることになり、現場に立ち会わせてもらいました。樹木医が出した結論は、移植したら枯れる可能性が高いということでした。

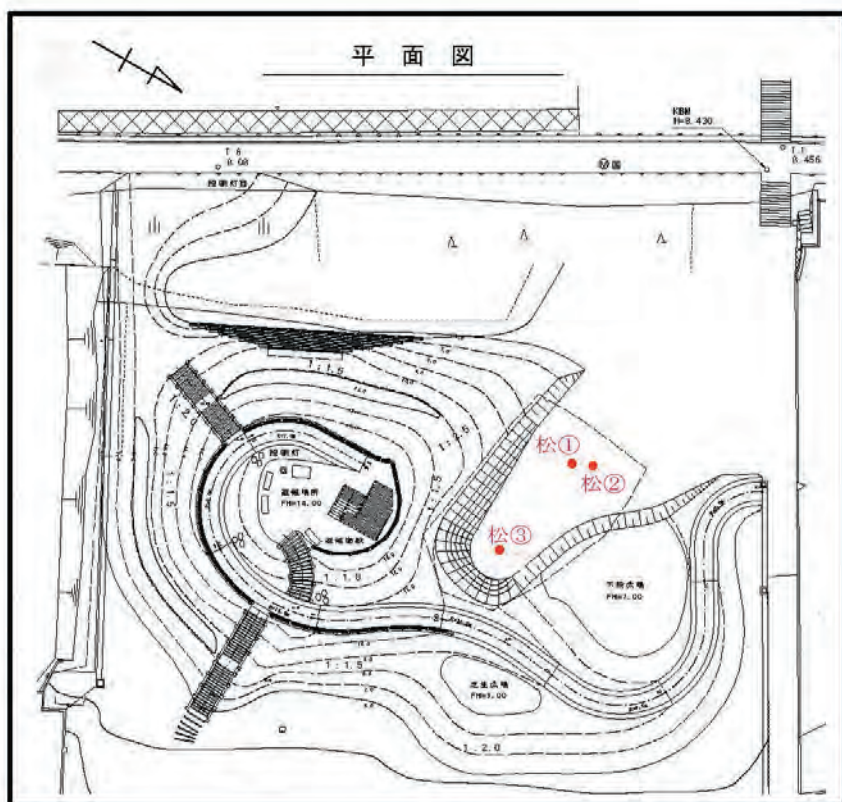
このため、沼津市当局は、三本の太い松の移植を断念。「築山」の土嚢積みになつている部分について、三本の松の木の根を圧迫しないように配慮しながら補強し、安全な「築山」にする計画だそうです。

・・・

千本松原は戦国時代、戦乱によって伐採されたものの、増上(ぞうじょう)上人(にん)(乗運寺の開山)が塩害に苦しんでいた住民と力を合わせて復元した松原だと伝えられております。

また、大正十五年には、この千本松原の松を伐採しようとした県の計画に、歌人若山牧水は、乗運寺住職林彦明(げんみょう)や住民と共に反対する運動に立ち上がり、この計画は中止されました。

住民によって植えられ、幾世代もの人々によって守られてきた千本松原は、沼津市にとって、かけがえのない大切な財産です。



松①と松②を「夫婦の松」、松③を「孤高の松」と林理事長が命名

築山地内の松の根の状況について

○これまでの経過

平成27年3月27日 松①, ②, ③の根の現状調査(樹木医立会い)。
 平成27年4月13日 3本の松の移植に向け根回し開始、環状剥皮(樹木医立会い)。
 平成28年1月28日 発根状況調査(樹木医立会い) 移植に耐える発根が見られず。
 平成30年2月8日 発根状況調査(樹木医立会い) 前回から2年後における調査。

○2月8日調査結果(樹木医正木先生)

- ・松① ×移植不可 樹勢弱く、新しい発根が確認できない。
- ・松② ○移植可能 樹勢が良い。発根が確認できるが、単独での移植は困難。
- ・松③ △移植不適 発根が十分でなく、移植した場合に枯れる可能性がある。

○今後の方針

1. 松は、現状のまま保存することとし、移植は行わない。
2. それに伴い、松を現位置に残しながら、築山の最終形整備を行う。

以上の方針を踏まえ、平成30年度に具体的な整備内容について、検討を行っていく。

築山の「平面図」と「築山地内の松の根の発根状況について」は、沼津市提供

今、千本松原の松の木が一本も伐採されず、生かされることに感謝し、現に存在する「築山」が、多くの方に親しまれ、愛される、松原と一体化した美しい「山」になってくれる

ことを期待することになります。
 そして、自然と共に生きているのだということ再認識し、自然を大事にしていきたいと思っています。

ご支援してくださった大勢の皆さまに、あらためて心から御礼申し上げます。

沼津朝日新聞(平成三十年二月十七日)から転載

築山の松 移植断念

巨木3本 発根不十分

沼津



沼津市は津波避難のための「築山」造成に伴い、別の場所に移植予定だった樹齢100～150年のクロマツの巨木3本について、移植を断念し現地で保護する方針を決めた。2015年4月、移植を前提に根の表皮をはぐ「根回し」をしたが、新たな根の発根が思わしくなく、移植すると枯れると判断した。

3年たつにもかかわらず、3本のうち1本は新しい根が生えず、1本は発根が不十分。残る1本は根が生えたが、根が生えなかった松と古い根を絡み合わせており、1本だけ切り離して移植はできないと判断した。

築山は海拔14段で、頂上に高さ2・3段のデッキがある。約300人が避難可能。3本の松を避けて造ったため、松の周囲の斜面だけ表面が土のう積みになっている。市の塩崎・危機管理監は「雨風にさらされる斜面の保護方法や、松の方面から築山へ登る避難路をどう設けるかを今後検討したい」と話した。

築山のマツ 現状保存へ

沼津市 樹勢弱く移植を断念

沼津市は同市本に整備している津波避難用人工高台「築山」の敷地内にあり、移植を検討してきたマツ3本について、樹勢が弱いなどの理由で移植を行わず、現状保存する方針に変更した。14日の市議会総務委員会で報告した。

3本のマツは新しい根を生やすための「根回し」の作業を行い、市が建設予定地の敷地内に見たが、発根が十分でなく、移植すれば枯れてしまう可能性が、沼津牧水会の役員らとあるなど樹木医から反対を受けて原則1本も切らずに整備。2016年4月から暫定供用を開始した。築山頂上部には17年3月にデッキが完成し、海抜16・3段。全体で約300人が避難可能という。

平成30年2月15日(木) 静岡新聞

■千本松原の移植せず

沼津市が津波対策で沼津港の外港脇に人工高台「築山」の整備を進めていることに伴い、予定地の「千本松原」に残る大きな松3本を移植できるか検討していた問題で、市は14日の市議

会総務委員会で、松を現状のまま保存しつつ築山を整備していくと報告した。市によると、樹木医の調査で3本いずれも移植には適さないことが確認されたという。築山は2016年4月にほぼ完成している。

平成30年2月15日(木) 毎日新聞 静岡版

平成30年2月15日(木) 朝日新聞 静岡版

築山、松を残して整備へ

発根不十分で移植不可能と結論

市危機管理課は、千本松原内に建設中の津波避難用人工高台「築山」建設で、クロマツを三本Ⅱ写真Ⅱの移植に向け、樹木医の正木伸之さんの指導で移植可能かどうか調査してきたが、十三日に行った発根確認の結果、三本とも「移植は困難」との結論となり、現状のまま築山の最終形を整備を行うことと十四日に開かれた市議会総務委員会報告した。

築山の建設計画は平成二十六年に市が発表した。東日本大震災を受け、千本浜防潮堤にある市立とぎわ保育所の職員や保護者から津波への不安が持ち上がり、市子育支援課に要望が出されたのをきっかけに、当時の栗原裕康市長が釜井市で計画された「平成の命山」をヒントに築山を提案した。

しかし、市民への事前説明もなしに建設のためにクロマツ百五十本程を伐採する計画であることが知られた。津波避難用人工高台「築山」建設で、クロマツを三本Ⅱ写真Ⅱの移植に向け、樹木医の正木伸之さんの指導で移植可能かどうか調査してきたが、十三日に行った発根確認の結果、三本とも「移植は困難」との結論となり、現状のまま築山の最終形を整備を行うことと十四日に開かれた市議会総務委員会報告した。

その後、計画が見直され、築山の敷地として必要な場所を生やしたクロマツ九本のうち、比較的若い六本は別の場所に移植されて、順調に根付き、樹齢五十年から百年以上と見られる三本については移植が可能かどうかを判断するため、正木さんの指導で二十七年四月に根回しを行い、昨年一月と今年二月八日に根の回復具合を調査した。

正木さんによる調査の結果、一本は樹勢が弱く新しい発根が確認できなかったため移植不可。もう一本は樹勢が良く、発根が確認できたが、移植不可の木と根が複雑に絡んでいるため、結果的に移植は不可能と判断。

一方、樹齢百年以上と見られる木について



は、樹勢が弱く、発根は確認できるが十分でなく、継続的に養生の必要があったり、枯れるリスクがあり、枯れる可能性があると考え、三本とも移植せず、現状保存されることになった。

松の伐採中止を要望してきた林理事長は、「松が一本も切られずに済んで良かった。要望に沿って松を残した市の努力に感謝している。築山が今後、避難施設として、どのような形になるかわからないが、安全に避難できるものになることを願っている」と話している。

現在、築山は市民の散歩コースにもなっており、築山を歩いている男性は「歴史のある松が切られずに生き残ったのは良かったと思う。避難施設としても緑地担ぎしなるのでは」と話していた。築山の最終整備については三年度中、この三本を残した形でこの具体的な整備内容を検討していくという。

平成30年2月17日(土) 沼津朝日新聞

牧水ゆかりの松 残った

津波避難用築山 沼津市、移植せず整備へ



移植せずに現状保存することが決まった築山のクロマツ＝沼津市本で

沼津市が駿河湾岸の景勝地「千本松原」で整備を進めている津波避難用の築山について、市は築山の敷地内に生えている三本のクロマツを移植せずに保存する方針を固めた。

市は二〇一五年度から築山の整備を始め、現在は高さ十四メートルの山と屋上デッキが完成し、三百人が避難できる状態になっている。晩年に沼津に移住した

戦前の歌人若山牧水が千本松原の景色を好んだことから、牧水を愛する市民らでつくる「沼津牧水会」がクロマツの伐採に反対。市はクロマツを移植し、跡地に芝生広場や避難階段を設置する計画を立てていた。

ところが樹木医の調査で、クロマツの根の状態が悪く、移植すると枯れてしまつ可能性があることがわかったため現状保存を決めた。

市危機管理課の担当者は「避難時の安全性に支障が出ないよう、一八年度中に具体的な築山の整備計画を定めたい」と見通しを示した。

牧水会の林茂樹理事長は取材に「昔から塩害を防いできてくれたクロマツが残ることになってよかった。築山は今の形状のまま、危険のないように整備してほしい」と話した。(杉原雄介)

平成30年2月17日(土) 東京新聞 静岡版

第64回沼津牧水祭 短歌大会

十月一日(日)
午前十時三十分
沼津市立図書館
視聴覚ホール



さわやかな秋風のそよぐ十月一日(日)、沼津牧水祭・短歌大会が沼津市立図書館視聴覚ホールにて催された。講師として「塔短歌会」の選者である花山多佳子先生をお招きし、和やかな雰囲気包まれながらの開演であった。花山先生の父上は沼津に縁のあった歌人玉城徹先生である。花山先生が登壇されて開口一番「沼津の地に降り立ち、懐かしい思い」との嬉しいお言葉をいただいた。

午前の部は、花山先生による「明治四十三年というエポック―柴舟・牧水・啄木」と題した講演。明治四十三年頃の略年譜に沿って、牧水と年齢の近い歌人たちの短歌に対する模索の時代について、作品をもとに語られ、当時の若き歌人の交流の様子や短歌の歌風の移り変わりについて述べられた。牧水を囲む人間模様も興味ある話であった。

午後の部は、本大会に出詠された百一首の短歌の中から、出席者の七十五首について花山先生から歌評があった。柔らかな物腰で語る歯切れのよい批評は、実に気持ちがよく、明確であり、素直に聴き手の心に入っていく。全体的に「説明的なうた」や「そうですかうた」が多いことも、あらためて自分の中の反省材料となった。詠み手が表現したい情景や心情などをそのまますべて詰めこむのは趣にかけるのだと語られた。花山先生の穏やかで気さくな人柄に触れ、さらに短歌に魅せられた一日であった。

講師選の「牧水賞」三首と出詠者による互選賞七首を紹介する。(本会会員 河本尚子)

牧水賞一席 賀茂郡河津町 村松秀代
裏山の夏草をみな刈り倒し覇者の寝息を
たてゐる夫は

牧水賞二席 静岡市 鷺巣錦司

ソフトクリーム買ってもらったおきな子は自由の女神のごとく揚げる

牧水賞三席 多摩市 柳田主於美

草掻りしてゐる背に「おひるよ」と声の聞こえて風の過ぎゆく

市長賞 賀茂郡河津町 村松秀代

裏山の夏草をみな刈り倒し覇者の寝息を
たてゐる夫は

市議会議長賞 千葉県山武市 立川目陽子

子と荷物のせてふくらむママチャリが保育園への路地飛ばしゆく

教育長賞 山口県宇部市 藤井重行

いのち受く儀式のやうに子蛙はしづかに蚯蚓を呑みくだしたり

商工会議所会頭賞 沼津市 佐藤なほ子

去年の秋夫の残しし種を播きポケット一杯摘みし絹ぎや

観光協会会長賞 沼津市 桜井光子

先に逝きし息子と共に帰りませ玄関あけて迎火を焚く

沼津朝日新聞社賞 御殿場市 勝亦はる江

干大根さながらなりし我が腕に九十年の歲月刻まる

マルサン書店賞 焼津市 増井春江

百日の入院終えし翌朝は大の字になり蟬の声聞く

第64回 沼津牧水祭

碑前祭・芝酒盛

十月十五日(日)午前十一時

碑前祭・芝酒盛の弱点は雨。最近の天気予報は当たる確率が上がっており、一週間前の予報が雨。林茂樹理事長と打合せた結果、牧水歌碑の前ではなく、牧水記念館のラウンジで開催することを決断する。会場の関係から芝酒盛の演目の詩吟と太鼓は遠慮願うことにする。参加者の減ることを予想して、弁当の数も減らすなど、事前の調整を種々行い、当日を迎える。昭和六十二年の牧水記念館開館以来、碑前祭を雨天のために記念館で催すのは三回目となるが、雨天にも拘らず、参加者が次々と記念館へ参集される。

林理事長の挨拶、昨秋当選した大沼明穂沼津市長をはじめ、服部裕美子沼津市教育長、頼重秀一沼津市議会議長、沼津市議会議員がご臨席くださる。田原大三東京牧水会会長、伊藤輝和愛知牧水顕彰会事務局長及び群馬県中之条町から篠原文雄議員以下五名など、遠方からも多数のご参加をいただく。

初参加の大沼市長から、沼津牧水会が永年巨り沼津市の文化活動の中心的役割を担ってきた功績を称える祝辞があり、服部教育長の祝辞につづいて、榎本簗子館長からは、挨拶

の中で、雨の中、千本浜公園の牧水歌碑への献酒・献花を済ませたとの報告があった。花柳寿宗氏の「牧水を舞う」の披露につづき、「中学生短歌コンクール」の表彰式が行われた。沼津市内十七校から応募のあった一八六〇首の中から特選十首に選ばれた中学生が前へ整列し、表彰された。選者を代表して杉山重義理事からの講評があった。

高田紹代さんによる牧水の「沼津を詠んだ歌」の独唱、渡邊義昭代表率いる「牧水のうたを歌う会」の合唱の歌声が響き渡った。

恒例の鏡割りは、「幾山河」の掛け軸の前で



大沼市長、頼重市議会議長、篠原中之条町町議、田原東京牧水会会長、伊藤愛知牧水顕彰会事務局長、榎本館長の六名で行われ、頼重議長、乾杯の音頭で祝盃をあげた。

ラウンジは、清酒牧水と桃中軒の特製弁当に笑顔が拡大し、次第に賑やかさが増し、和やかな雰囲気の中で、高田紹代さんの牧水「酒の歌」の独唱、ぬまづ観光ボランティアガイドと沼津ハーモニカクラブの合唱・合奏が心を潤してくれる。つづく鈴木弘行氏の司会による「みんなで歌おう」日本の歌・牧水の歌は、参加者が一緒に歌い、湿った雨天の気分を歌声と酒で気分を高めてくれた。

会場の都合で、岳心流沼津愛吟国風会の詩吟と裾野五竜太鼓保存会の勇壮な太鼓の音が聴けず残念であったが、その他の出演団体の方々が例年どおりの演奏や合唱などをしてくだり盛り上がった。

館外には、売店として初参加してくれた沼津我入道漁業協同組合の魚や揚げ物や加工品が並び、その横には、おしるこや飲み物のブースもあって、来場者に憩いの場を提供してくれた。庭に設けたテントでは、持参の肴を囲んでの小宴会も開かれていた。

雨天のため、事前の準備を含めて、出演団体の方々や関係者にご迷惑をかけたことをお詫び申し上げます。来年はぜひ好天の下での碑前祭・芝酒盛が盛大に開催できるよう祈念しています。関係各位には引きつづきのご協力をお願いいたします。

(沼津牧水祭・碑前祭実行委員長 金子安夫)

第30回

雛の歌会

三月三日(土)
午後一時三十分
沼津市若山牧水
記念館ラウンジ

千本松原と沼津垣をひな段の屏風の如く設えて、第三十回「雛の歌会」は、講師に永田紅先生をお迎えして開催された。雛祭りにびつたりな美しいドレスの先生は「おひなさま」のようであった。

はじめに講師の紹介。先生は「塔短歌会」所属で、「風の昼」三十首で第八回歌壇賞、第一歌集『日輪』で第四十五回現代歌人協会賞を受賞。京都大学農学博士で細胞生化学研究者であり、欧州生化学連合より最優秀若手研究者賞。京都府文化賞奨励賞も受賞された。歌人、科学者、妻、母親と万能な先生に評



をいただける幸運に胸躍る中、出詠七十四首、出席四十三名の歌評は進められていった。

先生の歌評は、作者が詠みたかったことを丁寧に取り出し、分析し、瑞々しい感性で命を吹き込む。そのように思えてならなかった。

会が進むなか、先生が心をとめた歌について少し記したいと思う。

「痛だったの」とこぼれた言葉を「ありがとう生きててくれて」と君が拾う

母上の故河野裕子先生を痛で亡くされた先生の実感。病氣の人にかける言葉の難しさ。でも、この歌の作者には傷つく言葉でなくてよかった、としみじみ語った。

戦死せし息子三人の名を呼びて おりん
叩きし亡母の姿頭つ

名を呼び祈ることですつと繋がっていられる。先生は、小二の頃から仏前に祈る習慣がつき、以来三十数年「二日無事で有難う」と。その祈りが生きる上の謙虚さに繋がっている、と語った。

「よいお歳召されましたね」五十年ぶりに聞く声なほ若やげり

歳を重ねると使える言葉。学生時代アルバイト先で「かしこまりました」等の接客用語を初めて実感し使ったこと。ご主人や、父上の永田和宏先生が公の立場で「私」や「ござい
ます」を使うこと。そして、お子さんが生まれ

家に寝かせた時、「おゝ、みどり児だ!」と実感の言葉と出会った、と心を込めて語った。

途中、キジ猫の訪問があり、先生もしばし和まれ、豊かな知識からの講話ながら自然体でおだやかな良い会であった。

最後に「選者賞」十首を紹介する。

(本会会員 山田弘子)

「奥山に」と歌を唱える小三の男の子
の声が受話器より洩る 増井春江

酸っぱさは寒さとなりて橙色の皮を波立つ海に放りぬ 永久保英敏

イヌブナとブナの葉別けて「広辞苑」のページの森の葉としよう 山田弘子

吾娘の来て蛇口の水を細くする水の尊い国に暮らせば 佐藤なほ子

どの車もリヤーガラスにいつぱいの鰯雲積み家路を急ぐ 長野堯子

盆ざるに大根切りて並べ干す寒早らし今日も晴天 川辺典代

柚子の皮きざみ香りの残る手で二度漬合せむと白菜絞る 山田純子

通院する夫に付き添ふこの日ごろとみに素直な夫をさびしむ 山田米子

一歩づつ駅の階段ふむごとにをさな児の掌はてすりを昇る 立川目陽子

自浄作用を待つことき日日ご返事は無要とややにぎごちなく添へ 大原葉子

文 化 講 座

初心者のための短歌講座

日 時 平成29年4月～平成30年3月
毎 月 第2土曜日 午前(全11回)
講 師 須永秀生氏(第1回～第2回)
青木朝子氏(第3回～第11回)



牧水記念館短歌会

日 時 平成29年4月～平成30年3月
毎 月 第2土曜日 午後(全11回)
講 師 須永秀生氏(第1回～第2回)
青木朝子氏(第3回～第11回)



牧水記念館俳句会

日 時 平成29年4月～平成30年3月 隔月第4日曜日 午後(全6回)
講 師 榎本好宏氏



書 道 講 座

日 時 平成29年4月～平成30年3月 毎月第3火曜日 午後(全10回)
講 師 成田真洞氏



サロン音楽の夕べ

沼津市若山牧水記念館ラウンジ

久元祐子「ピアノコンサート」オール・モーツァルト・
プログラム あいまいに 池内紀先生との対談つき
(共催：一般社団法人沼津倶楽部)

日 時：平成29年8月19日(土) 午後6時30分
出 演：久元祐子(ピアノ)、
池内 紀 先生(ドイツ文学者・エッセイスト)
来場者：52人



古楽コンサートシリーズ 35
「チェンバロの夕べ ～ ソロと連弾～」

日 時：平成29年9月17日(日) 午後6時45分
出 演：鈴木真澄、杉山佳代(チェンバロ)
来場者：85人

和洋物語 ヴァイオリンと和楽器で奏でる音魂

日 時：平成30年2月17日(土) 午後6時30分
出 演：山内達哉(ヴァイオリン)
大河内淳矢(尺八) Kohki(ギター)
本間貴士(箏)
来場者：55人



古楽コンサートシリーズ 36
「2本のよこ笛とチェンバロの夕べ」

日 時：平成30年3月11日(日) 午後6時45分
出 演：石和美和、野田枝里
(フラウト・トラヴェルソ、フルート)
杉山佳代(チェンバロ)
来場者：100人

平成 29 年度 事業 報告

第31回定時会員総会	平成29年5月11日(木) 午後6時～7時
理事会 第1回(通算159回)	平成29年4月11日(火) 午後6時～7時10分
第2回(通算160回)	平成29年5月11日(木) 午後5時～5時15分
第3回(通算161回)	平成29年7月20日(木) 午後6時～7時
第4回(通算162回)	平成29年12月13日(水) 午後6時～7時10分
第5回(通算163回)	平成30年3月6日(火) 午後6時～7時

会 報 第30号 平成29年5月15日発行

館 報 第59号 平成29年9月15日発行
第60号 平成30年3月1日発行

『牧水 揮毫旅行記』平成29年10月1日発行

1 調査研究事業

- 第15回「日本ほろよい学会」伊丹大会
～酒と短歌と俳句と川柳～(主催：日本ほろよい学会 共催：伊丹市)
日 時：平成29年4月22日(土) 午後2時
会 場：伊丹商工プラザ、伊丹シティホテル
参 加 者：林茂樹、浅井治、金子安夫、長澤靖夫、鈴木弘行、
有賀直子、石田孜郎、石田多嘉子、小出和夫、鈴木玲子、
原悦子、三宅芳則、山下数高、大島葉子
- 第18回「百草園牧水歌碑祭」へ参加(主催：東京牧水会)
日 時：平成29年8月27日(日) 正午
会 場：東京都日野市百草園王百草園 牧水歌碑前
参 加 者：金子安夫、河辺龍二郎、原悦子、三宅芳則
- 第67回 日向市の「牧水祭」へ祝電(主催：宮崎県日向市)
日 時：平成29年9月17日(日) 午前9時30分
会 場：日向市東郷町坪谷若山牧水生家裏牧水歌碑前及び
牧水公園「ふるさとの家」
- 第61回 暮坂峠「牧水まつり」へ祝電(主催：牧水詩碑保存会)
日 時：平成29年10月20日(金) 午前11時
会 場：群馬県吾妻郡中之条町 暮坂峠
- 第84回 延岡市の「牧水歌碑祭」へ祝電(主催：若山牧水延岡顕彰会)
日 時：平成30年3月18日(日) 正午
会 場：延岡市城山公園内牧水歌碑広場

2 第64回沼津牧水祭の運営

- 短歌大会
日 時：平成29年10月1日(日) 午前10時30分～午後3時30分
会 場：沼津市立図書館 視聴覚ホール
講 師：花 山 多佳子 氏(「塔短歌会」選者)
応募短歌：101首
参 加 者：75人
- 碑前祭・芝酒盛
日 時：平成29年10月15日(日) 午前11時～午後2時
会 場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
参 加 者：244人

3 沼津市若山牧水記念館開館30周年記念特別企画「牧水と旅」

- 日 時：平成29年9月26日(火)～12月3日(日)
会 場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
入 場 者：1,071人

4 文学講演会及び文学講座等の開催

- 牧水記念館歌話会「牧水を語る～牧水と千本松原～」
日 時：平成29年6月18日(日) 午後2時～4時
会 場：沼津市若山牧水記念館会議室
講 師：曾 根 耕 一 氏、青 木 朝 子 氏
参 加 者：34人
- 文化講演会「牧水と旅」
日 時：平成29年10月29日(日) 午後2時～4時
会 場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
講 師：伊 藤 一 彦 氏
参 加 者：58人
- 第30回「雛の歌会」
日 時：平成30年3月3日(土) 午後1時30分～4時20分
会 場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
講 師：永 田 紅 氏(「塔短歌会」)
応募短歌：74首
参 加 者：48人
- 初心者のための短歌講座
日 時：平成29年4月～平成30年3月
毎月第2土曜日 午前10時～12時
会 場：沼津市若山牧水記念館会議室
講 師：須 永 秀 生 氏、青 木 朝 子 氏
参 加 者：11回開催 延べ214人
- 牧水記念館短歌会
日 時：平成29年4月～平成30年3月
毎月第2土曜日 午後1時30分～3時30分
会 場：沼津市若山牧水記念館会議室
講 師：須 永 秀 生 氏、青 木 朝 子 氏
参 加 者：11回開催 延べ101人

(6) 牧水記念館俳句会

- 日 時：平成29年4月～平成30年3月
隔月第4日曜日 午後2時～4時30分
会 場：沼津市若山牧水記念館会議室
講 師：榎 本 好 宏 氏
参 加 者：6回開催 延べ99人

(7) 書道講座

- 日 時：平成29年4月～平成30年3月
毎月第3火曜日 午後1時～3時
会 場：沼津市若山牧水記念館会議室
講 師：成 田 真 洞 氏
参 加 者：10回開催 延べ69人

●平成29年度「書道講座」受講者作品展示

- 期 日：平成30年3月20日(火)～3月31日(土)
会 場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
入 場 者：209人

(8) 第28回「中学生短歌コンクール」募集・表彰

- 募集期間：平成29年4月13日(木)～7月31日(月)
応募短歌：1,860首(17校1,860人)
入選短歌：50首

- 選 者：青木朝子、曾根耕一、永久保英敏
表 彰：平成29年10月15日(日)「沼津水祭・碑前祭」にて

(9) 音楽イベント

- 第1回 久元祐子「ピアノコンサート」オール・モーツァルト・プログラム
あいまい池内紀先生との対談つき(共催：一般社団法人沼津倶楽部)
日 時：平成29年8月19日(土) 午後6時30分
会 場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
出 演：久元祐子(ピアノ)、池内 紀(ドイツ文学者・エッセイスト)
来 場 者：52人
- 第2回 古楽コンサートシリーズ35 チェンバロの夕べ～独奏と連弾～
日 時：平成29年9月17日(日) 午後6時45分
会 場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
出 演：杉山佳代(チェンバロ)、鈴木真澄(チェンバロ)
来 場 者：85人
- 第3回 和洋物語～ヴァイオリンと和楽器で奏でる音楽～
日 時：平成30年2月17日(土) 午後6時30分
会 場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
出 演：山内達哉(ヴァイオリン)、大河内淳矢(尺八)、
Kohki(ギター・三味線)、本間貴士(箏)
来 場 者：55人
- 第4回 古楽コンサートシリーズ36 2本のよこ笛とチェンバロの夕べ
日 時：平成30年3月11日(日) 午後6時45分
会 場：沼津市若山牧水記念館ラウンジ
出 演：石和美和、野田枝里(フラウト・トラヴェルソ、フルート)、
杉山佳代(チェンバロ)
来 場 者：100人

5 その他の事業

(1) 協賛事業

- 第88期将棋「棋聖戦」第3局 羽生善治棋聖対斎藤太郎七段
(主催：産経新聞社、公益社団法人日本将棋連盟、日本将棋連盟沼津支部、
第88期将棋「棋聖戦」第3局開催実行委員会)
(後援：沼津市、沼津市教育委員会、沼津商工会議所、沼津市商工会、
沼津観光協会、沼津倶楽部、プロジェクトN、本会)
対 局：平成29年7月1日(土) 午前9時
会 場：沼津倶楽部
前夜祭：平成29年6月30日(金) 午後6時
会 場：沼津リバーサイドホテル
こども将棋大会：平成29年6月25日(日) 午前10時
会 場：沼津市若山牧水記念館
シニア将棋大会：平成29年6月25日(日) 午前10時
会 場：沼津市若山牧水記念館
指導将棋会：平成29年7月1日(土) 午前10時
会 場：沼津市若山牧水記念館
大盤解説会：平成29年7月1日(土) 午後2時
会 場：沼津市若山牧水記念館、沼津倶楽部
参加者数：前夜祭354人、こども将棋大会74人、シニア将棋大会9人、
指導将棋会26人、大盤解説会224人

公益社団法人沼津牧水会定款（抜粋）

- 第一条 この法人は、公益社団法人沼津牧水会と称する。
- 第二条 この法人は、主たる事務所を静岡県沼津市千本郷林一九〇七番地の二に置く。
- 第三条 この法人は、歌人若山牧水を顕彰し、文学的業績の研究を深め、短詩型文学の普及を図り、もつて、教育文化の振興に寄与することを目的とする。
- 第四条 この法人は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。
- (1) 歌人若山牧水に関する調査研究
- (2) 沼津牧水祭（短歌大会及び碑前祭）の運営
- (3) 文学講演会、文学講座等の開催
- (4) 沼津市若山牧水記念館の刊行
- (5) 沼津市若山牧水記念館の管理運営の受託
- (6) その他この法人の目的を達成するために必要な事業
- 第五条 この法人に次の会員を置く。
- (1) 正会員 この法人の目的に賛同して入会した個人又は団体
- (2) 賛助会員 この法人の事業を援助する個人又は団体
- (3) 名誉会員 この法人に特に功労のあつた者で、会員総会の決議をもって推薦されたもの
- 第六条 前項の会員をもつて、一般社団法人及び一般財団法人に関する法律上の社員とする。
- この法人の会員にならうとするものは、入会申込書を理事長に提出し、理事会の承認を受けなければならない。ただし、名誉会員に推薦された者は、入会の手続を要せず、本人の承諾をもつて会員となるものとする。
- この法人の事業活動に経常的に生じる費用に充てるため、会員になった時及び毎年、会員は、会員総会において別に定める額を支払う義務を負う。
- 第七条
- 公益社団法人沼津牧水会入会金及び会費規程
- 第一条 この規程は、公益社団法人沼津牧水会定款第七条に基づき、入会金及び会費について定めることを目的とする。
- 第二条 定款第七条第一項に規定する入会金は、次のとおりとする。
- (1) 正会員 一〇、〇〇〇円
- (2) 賛助会員 三〇、〇〇〇円以上
- 第三条 定款第七条第一項に規定する会費は、次のとおりとする。
- (1) 正会員 五、〇〇〇円（年額）
- (2) 賛助会員 一〇、〇〇〇円以上（年額）

（理事長）林 茂樹（副理事長）杉山 重義 浅井 治
 （理事）保坂 輝夫 田中 和男 金子 安夫 四方 一弥 八十濱俊一
 長澤 靖夫 青木 朝子 河辺龍二郎 永久保英敏
 （監事）鈴木 弘行 栗原 進
 （事務局）大島 葉子 伊藤早智子 近藤美智代 納谷 瑞穂

編集後記

「若山牧水を顕彰する記念館を」と有志が集い、募金活動を行った努力が実り、沼津市若山牧水記念館が昭和六十二年十一月一日に開館し、三十周年を迎えることができました。皆さま方の応援のおかげだと感謝いたしております。

開館三十周年を記念する特別企画展「牧水と旅」を開催し、併せて、牧水が沼津に惚れ込んで沼津に永住を決意し、沼津に住居を建設するための資金調達を目的とした「揮毫旅行」を記録した紀行文を取めた「揮毫旅行記」を刊行しました。

特別企画展開催中に、日向市の若山牧水記念文学館館長伊藤一彦先生をお招きして「牧水と旅」と題する文化講演会を開催しました。たくさんの方々が参加があり、貴重なお話を聴かせていただける充実した時間となりました。伊藤先生には、玉稿をお寄せいただきました。

伊丹市で開催された「日本ほろよい学会」に会員有志が参加し、鈴木弘行監事が「紀行文」を寄稿してくださいました。

沼津市による津波避難用「築山」造成計画の顛末についての林茂樹理事長の報告を、新聞記事を掲載しつつ載せました。

「沼津牧水祭・短歌大会」の講師に花山多佳子先生を、「雛の歌会」の講師に永田紅先生をお迎えしました。沼津牧水祭・碑前祭は、雨天のため記念館で催しましたが、多くの方々にご参加いただき盛大に開催できました。「短歌講座・短歌会」「俳句会」「書道講座」及び「サロン音楽の夕べ」も好評でした。

将棋「棋聖戦」第三局が沼津倶楽部で開催されましたが、大盤解説会ほかのイベントが当記念館で催され、沼津リバーサイドホテルでの前夜祭にも大勢の参加者がありました。本年も六月三十日に対局、六月二十九日に前夜祭が催されます。

本年度の諸事業については、当記念館へお問い合わせください。本年度も変わらぬご支援をお願い申し上げます。